

近。七月下旬〜八月上・中旬 ウクルル、フミネ、  
タナン、ショジクト、トンへ附近。八月下旬 トン  
へ、アロー、ヘロー、チンドウ河渡河。八月下旬〜  
九、十、十一月 ワヨンゴン、ピンレブ、マンダ  
レー附近。

昭和二十年

一月〜四月 シボー、ランキ、モンギヤイ。五月中  
旬 ホーボン附近。五月下旬〜八月 チマピユ、  
モーチ、ナタン附近。九月 クンヤム。十二月  
ナコンナヨーク集結。

昭和二十一年

六月 バンコック乗船。七月克蘭ゲン乗船

## 一兵士のビルマ雲南戦記

佐賀県 岸 川 力 蔵

戦火燃え盛る昭和十七年四月、教育召集令状により  
久留米西部第四十八部隊第一機関銃中隊に入隊、約三

か月間の猛特訓を受け、訓練終了後直ちに臨時召集に  
切り換えられると予想していたが、召集解除となった。

佐世保海軍廠物資部に再就職、昭和十八年九月臨時  
召集令状を受けた。いよいよ戦地行きかと思ひ緊張の  
中に覚悟を決めて久留米西部第四十八部隊の営門をく  
ぐり、連隊本部横の武道場に「龍」「菊」部隊要員が満  
員すし詰めの状態で宿泊、一か月間の猛特訓を受けた。  
十月中旬ごろビルマ派遣要員として出発命令を受けた。  
歩兵第四十八部隊は営門を出るにあたってもラッパ  
吹奏もなく粛々として隊列をととのえ行進していった。  
部隊は久留米市明善中学校校庭に集結した。整列を  
終えると闇夜の中に人影が多数近付いてきた。出征者  
の家族である。我々補充要員二百名の半数は妻子の  
ある人達である。部隊長の心温まる計らいで極秘のう  
ちに最後の別れの機会を与えてくれたのである。  
私は当時独身であったがこれが今生の別れになると  
思えば目がしらが熱くなって、胸に火を焚くように  
あった。妻や子供達と別れてゆく人はその哀惜の情如  
何ばかりと察するに余りあるものがあつた。

久留米駅を出発、列車の窓は外が見えないように扉で閉ざされていた。数時間後門司港に到着。既に岸壁に横付けされていた輸送船に乗船開始。我々補充要員百四十八名と二百名、福岡連隊百十三名と二百名、大村連隊百四十七名と二百名、それぞれに区分され各室に落ち着いた。憲兵の見送りだけで出港。一路南下して途中伊万里港に停船、夜を徹して海上を走り続け、翌朝輸送船団は海軍艦艇の護衛のもと無事上海に上陸約一か月間滞在した後、上海を出発して台湾、香港に寄港してバシーン海峡を通過、ベトナム沿岸に沿って南下、サイゴンに上陸、三日間滞在后再出発、タイのバンコク港に到着したのは昭和十九年一月一日、正月であった。

その後、タイ、ビルマ国境の鉄道沿線を徒步行軍、毎日歩き続けてようやくモールメンに到着することができたが、不幸にして私は悪性マラリアに患され、四十度から四十二度の高熱、目もかすんで見えなくなった。菊、龍補充要員の中我々約十人のマラリア患者をラングーンの兵站病院に入院させ、部隊は前線追及の

ため出発した。

その後約一か月の療養で熱も三十八度位に下がったが、龍師団本部よりの電報でマラリア患者は熱があらうと本隊に直ちに追及すべしとの命令があり、ラングーン駅から貨物列車に揺られ、途中マンダレー駅では菊の補充要員とお互いの武運を祈り励ましあい別れた。我々龍の補充員六名はその後ラシオ駅に到着、軍用トラックに乗せられ騰越に向かって発車、ビルマ国境を後にして雲南省騰越城に到着した。騰越城は約四キロ四方の城で、城門内で下車、徒歩で龍歩兵第一四八連隊第三大隊第三機関銃中隊に到着、追及到着の申告をした。

翌朝最前線に向け出発、前線陣地の交通壕の中で第三大隊長宮原少佐と中隊長に申告も終わり待機していると敵の戦闘機五、六機が爆音と共に飛来、急降下して機銃掃射と共に爆弾の雨。私は到着したばかりで初めての实战、生きた心地もなく震えが止まらない。古兵は慣れたもので壕に横穴を掘りその中に身をひそめている。私もそれにならって横穴を掘りその中に入っ

た途端に爆弾の雨、もう駄目かと思つたが横穴のおかげで命はとり止めた。

戦爆連合の爆撃はようやく終わりと一息ついたところ、敵の山砲弾（四連砲）が何千発ともなく射つて射ちまくってくる。その援護射撃のもとに敵雲南遠征軍、蔣介石直系歩兵部隊が壕の直前三十メートルの所まで攻撃前進してくる。友軍の各中隊は小銃、軽機、重機、擲弾筒の一斉射撃によって応戦、敵の戦死負傷も多数を出したが味方の戦死負傷も続出、衛生兵は救護活動で息つく暇もない。無我夢中で射つて射ちまくる。

第一線の敵は撃退したがまだ第二線、第三線と敵は頑強に攻撃を断続する。

激戦続行三日間、弾薬、食料、その他とくに水が欠乏した。宮原少佐の命令により圧倒的多数の敵、巨大なる物量の前に如何ともし難く死傷者は置き去りにして撤退することになった。断腸の思いで涙を流しながら後退した。

三日間の激闘で人間の顔とは思われない鬼の顔で

あった。第二大隊も怒江の流れる馬鞍山に陣地をとっていたが、激戦で将兵の損耗がひどく撤退を余儀なくされ、下旬（ガデン）まで後退、抵抗戦陣地を構築したが敵はなだれを打って追撃してきた。米式装備であり重火器の猛攻撃を反復してくる。遂にここも支えきれずに撤退することとなった。

我々歩兵第三大隊と第二大隊（歩兵第一大隊は菊部隊応援のため北ビルマ、ミートキナへ派遣され、水口兵団長以下全員自決玉碎した）は騰越城に藏重大佐（連隊長）と山砲一個大隊、野戦病院、憲兵分隊、野戦倉庫第三千五百名が籠城、防備陣地を構築中である。その時既に福岡歩兵第一一三連隊の一個大隊が拉孟を守備していたが、玉碎寸前との情報が師団に入電していた。なおその後方の竜陵も危ないとの無電あり、我々一四八連隊第二大隊は騰越城の前の高良山を、第三大隊は飛鳳山を守備していた。敵蔣介石遠征軍は総攻撃の準備を整えつつあり、攻撃は目前に迫っていた。その時、突然師団命令で騰越守備隊一四八連隊第三大隊は（宮原大隊長）は、竜陵において苦戦しつつあ

る守備部隊を救出すべく援軍として竜陵に急行すべき命令を受けた。

藏重連隊長の顔には憂色漂い動揺の色をかくせなかったが、軍の命令は絶対である。

私は第三大隊第三機関銃中隊の一員であった。騰越城には野戦病院があつて入院患者の中には重傷患者、マラリア患者、その他応召以来苦楽を共にした数多くの戦友達がいた。今度の出動ではとても生還は望めない、最後の別れを告げたのは昭和十九年七月中旬と思う。夜中に騰越城において残された入院患者ほか多数の戦友達が城を枕にして玉碎したのである。いつまでも忘れることができない。

雲南作戦も第二期を終わり、断作戦第一期に入る。ビルマは雨期に入り竜陵は毎日雨統きで展望できる山という山は敵ばかり。一挙に強行突破しようとすれば全滅を覚悟しなければならぬ。そこで一山一山を各個に撃破する作戦をたて、正面に小銃中隊第八中隊を第一線にして、機関銃一小隊を配属して攻撃開始、敵は山上から無数の照明弾を射ち真昼のように明るくし

て小火器、重火器を交えての狙い射ちをしてくる。どうしても前進ができないので敵の動靜を見て一部迂回作戦をとり敵の後方より不意打ち、夜午前二時か三時ころ折良くドシャ降りとなった雨の中を喚声をあげて敵の陣地に突入。壕の中で逃げ遅れた敵兵を銃剣で刺殺、横穴に隠れている者も刺し殺し一つの山を占領することができた。我方の損害は軽微であった。

竜陵道路沿いの山を福岡第一一三連隊守備隊と連絡をとりながら一つの山から七つの山まで約一か月を要し、かつ多大の犠牲をはらって占領したのである。

中隊長、小隊長、分隊長の指揮官は猛戦闘の中で壮烈なる戦死、兵長が部隊の指揮をとって攻撃を続行する壮絶な激戦であった。竜陵の撤退道路である七山を占領し、撤退する友軍の通過を可能にしたが、空陸からする敵の反攻もまた激しさを増してきた。

福岡第一一三連隊の守備隊と、工兵連隊長小室中佐に竜陵陣地を任せ我々第一四八宮原部隊第三大隊は反転して芒市を守備する命令を受け夜になってから芒市に向けて出発した。第三大隊は芒市周辺を守備するこ

となり、ここに陣地構築を行った。深さ六尺の交通壕を各所に掘り、立木を斬り倒し二段に積み、それに土を厚さ二メートル積み、銃眼等も設け砲弾位ではびくともしない構造とした。陣地の前には鉄条網を張りめぐらし、掘りあげた溝の中に削いだ逆茂木を何万本も植え込み陣地の防備を嚴重にした。この陣地構築に一月の日数を要したのである。

この当時、敵の蒋介石總統が歩兵第一四八連隊第三大隊長宮原少佐に対して感状を送りつけてきた。敵ながらあつぱれとの賞詞である。我々將兵は啞然として驚き入った次第である。

この時急電により平塚で孤軍奮闘する大村第一四七連隊の一個大隊が敵の大軍に包囲攻撃を受け全滅まで後数日を残す苦戦しており、これを救出するために部隊は平塚の敵包囲軍を急襲撃破し大村大隊を救出すべしとの命令を受けた。

芒市守備は残置部隊に任せ、夜を徹して急行約二日の行程を強行軍した。山道、間道を通り急ぎに急いだ。馬も人も落後する者もいたが目的地平塚に朝まだ明け

きらぬ五時頃到着、敵状を偵察して一斉に攻撃を開始した。我軍の急襲により慌てて猛射する雨のような敵の十字砲火の中、巧妙な作戦と猛攻により敵陣地の一角を占領、次々と戦果を拡大して大村大隊の退路を確保した。

私は中隊長の命により数人と撤退路周囲の警備についていた。大村連隊長らしい人が警備の兵達に対して苦勞と言葉をかけてくれた。大隊本部を先頭に負傷兵、病人が担架に乗せられ連日の戦闘に疲れきった姿で間道を通って撤退して行く。

我々第三大隊四百名は殿車となって敵と交戦しながら後方に退って行く。途中で救援のため急行してきた朝鮮の竜山編成の狼兵団（第四九師団）の一個大隊の吉田部隊と合流した。その時ほど嬉しかったことはない。その中には佐賀県出身者も多かった。思わず大きな声で有難うとさげんだ。目的地の芒市に着いた時、ガダルカナル歴戦の勇士達である東北編成の勇兵（第二師団）が着いていた。

我々の宮原大隊長は健在であったが、中隊長、小隊

長、分隊長は全員残らず戦死して部隊の指揮統率がとれずどうにもならずいたところに、内地より将校、下士官が補充員として到着、それぞれ各中隊に配属された。これらの指揮官も多くが戦死して終戦後も故国の土を踏むことができなかった。

我々第三大隊は芒市の陣地に帰り守備についていたが、情報によると福岡第一一三連隊の一個大隊は拉孟で玉砕との無線を受けた。また騰越で別れた久留米部隊の藏重大佐以下多くの戦傷病者や戦友達も動ける者はすべて銃を執り雲霞のごとき敵と交戦中との入電があった。敵は攻撃を竜陵に集中してきた。軍は竜陵救援のため朝鮮竜山編成の狼部隊、東北編成の勇兵団を竜陵に急派した。

一方、陸の孤島である騰越も玉砕寸前である。以前、宮原大隊が激戦の上、占領した七つの山々も敵の手中に陥ち、引き続き激戦中である。

芒市守備の宮原大隊も軍命令により竜陵救援に出発しなければならぬ。狼部隊、勇兵団、久留米工兵大隊、歩兵第一四八、歩兵第一一三兩連隊と共同作戦を

とり占領された山々を兵器兵力の劣勢を乗り越え、多大の犠牲を払いながら一つの山二つの山と奪回することができた。

我々宮原大隊は竜陵の北、東北に布陣して騰越城を望見できる所から攻撃前進を開始したが、全滅寸前にある騰越城を目前にして、頑強な敵の応戦のため遂に攻撃を断念、東山に反転、引き返した。時に昭和十九年九月十四日であった。さて騰越の藏重部隊長以下全将兵重傷者以外はすべて銃を執り、命の尽きるまで戦って玉砕した「六号無線入電」。

第三大隊長宮原少佐は全将兵を東山の稜線に集合整列させ、騰越城に向かって一分間の黙禱を捧げた。全将兵は滂沱と流れる涙を止めやらず男泣きに泣いた。

休む暇もなく敵は戦爆連合を以て隙間もないジュウタン爆撃、山からは四連砲、自走砲、機銃掃射、身の置き所がない。タコ壺、横穴を掘って敵弾を避ける。近接肉迫してくる敵と手榴弾戦、弾のつきた者は銃剣床尾で戦うしかない。正に血風吹き荒ぶ地獄とはこのことであらう。

軍は遂に竜陵を放棄して芒市に撤退を命じ、予て構築しておいた堅固な陣地に據って防戦することとなった。

昭和十九年十月頃、内地から最後の補充要員が到着した。佐賀、長崎、福岡出身者であり私の地元の炭鉱の町である北方町から二級下の者が来てくれた。懐かしさの余りウォーといって手を握りしめた。

補充員は各中隊に配属された。戦地教育も受けずに任務につき、その日に来て、その日に突撃して戦死した者もいる（断作戦も第三期に入る）。騰越が玉碎したので連隊は第三大隊のみである。第一大隊も菊部隊応援のため出撃している。

芒市において新たに連隊を編成し、自分は第二大隊第二機関銃小隊の銃手として配属された。編成が終わり各中隊はそれぞれの陣地の配置についた。芒市で新連隊長を迎えた。年令五十歳を過ぎた頭に白いものがある相原大佐であった。旧大隊長宮原少佐戦死の報が入った。

第三大隊長宮原少佐は敵の陣地を眼鏡で偵察中敵の

四連砲弾が至近距離に落下、その破片が命中、本部の下士官等が手当をしたが息を引き取り戦死されたそうである。元の隊長でありその下で生死を共にしてきた者として悲憤の涙にくれることしばしばであった。宮原大隊長の御冥福を心から祈るのみである。

敵は芒市に対する総攻撃の準備を急いでいる様子である。戦闘を数多く経験した者には敵の行動でその企図を察知することができる。新しく内地から補充兵として着任した兵と陣地内の警備に就いていると、夕方近くなり薄暗くなったころ軍曹が壕の中に入ってきた。俺が機関銃の分隊長として着任したと知らせた。分隊長は北方町の隣の武雄市橋町のお寺の次男坊であり召集前は北方炭鉱の労務係をしていたそうである。分隊長はこの中に杵島郡の者はおらんのかとたずねたので、自分は杵島郡の者ですと答えると、杵島郡は何処かと問われ北方町の者だと答えた。目を丸くして「姓名は何というか」「岸川です」というと「岸川梅子さんの兄貴か」「そうです」「妹は北方炭鉱のキャップ室勤務だったので良く知っている。俺は松山軍曹である、分

隊長としてきたから宜しくたのむ」と。その日は夜明けまで壕の中で尽きない話をした。「岸川俺は結婚の日に召集令状がきた、心中複雑である」と話していた。

敵を目前にして不気味な警戒が続いた。分隊長は連隊本部付となり転属になった。同じ連隊内で行動は共にしていたが松山軍曹はビルマ、ラシオの戦闘で戦死された。ラシオの戦闘で戦死することが無ければ私と同じに復員することができたのにと、分隊長着任時壕の中で話し合ったことが思い出されて感無量である。

我々第三大隊と第二大隊は芒市周辺の台地を故宮原大隊長の名をとり「宮ノ台陣地」と名付けてここを守備した。

敵は総攻撃を開始した。空から戦爆連合の猛爆撃、爆弾を隙間もなく雨あられと投下した後から機銃掃射、新米の初年兵は内地以来初めての戦闘であり壕の中で右往左往。精神的にまいりしゃがみ込んで震えるばかり、初めは誰にでもある経験である。四連砲で連続して射ちまくってくる。敵の歩兵の第一線はジワリ、ジワリと接近肉迫してくる。宮ノ台陣地は無数の蟻に取

り付かれたように敵が上へ上へと這い上がってくる。各中隊は死物狂い。各分隊はこれが雲南最後の死場所であると三十対一の寡兵をもとせせず、弾のあらん限り射ちまくる。友軍の死傷者続出、衛生兵は手当に走り廻るがとてども追い付かない。

戦死した戦友の指を斬り落とし、飯盆に入れ、分隊長は己の首にさげた。重機関銃には馬が三頭付属している。「岸川お前は谷底に繋いである馬三頭を道路の向かい側の芒市を流れる河の橋まで移動、そこで待機せよ」と命令し、首に吊った斬ったばかりの生指四人分を入れた飯盆を渡し「早く行け」と大声でさげんだ。

橋まで約二キロの道を馬を引いて急いだ。道の傍には負傷兵が無数に天幕をかぶり、うめき声を上げながら横たわっている。その時軍用乗用車二台がスピードをあげ目の前を通り過ぎた。百メートル位離れた頃敵の戦闘機が急降下して機銃掃射した。先頭の車は火を噴き右側に転倒した。二台目の車は運転手が右側にハンドルを切りジャングルに突っ込んだので難をのがれた。その車には高級参謀の辻正信中佐が乗っていた。馬三



頭と橋を渡りジャングルの中に馬を繋いで分隊の下つてくるのを待った。

約三十分位待って夜も薄暗くなったころ分隊長以下六名位重機を分解搬送して橋を渡ってきた。橋を渡り終わると同時に橋を爆破した。途中道路に数多く並べたあつた負傷兵はどうなったのであろう。置き去りにされたのであろう。戦争の残酷さ悲惨さをしみじみと味あわされ、今日は人の身、明日はわが身、一分先の運命も分からない戦場であることを改めて思い知らされた。戦友達の目は暗夜の中で動物の目のように鋭く光っていた。芒市を撤退したが敵の追撃は急で、遂に雲南ビルマの国境線に急迫してきた。野戦病院の負傷者、病氣入院患者その他を譲りながらの撤退である。

国境近くに強力な陣地を構築して敵の進撃を食い止めるつもりであったが、敵の追撃が急で、迂回作戦をとり、竜兵団を包囲せんとする敵を迎撃するため工兵隊の協力を得て竜泉江を舟で渡河した。しかし敵は早くもこれを察知して約五百メートルある山に急造陣地を造り、逆に山上から逆襲された。犠牲者続出、われ

われは谷底で食事の用意をしていたが不意をうたれて、木の枝に戦死者の切断した指を入れた飯盆を掛けていたが、雨のような敵の猛射の中飯盆を忘れて工兵隊が用意した舟に乗り川を渡った。それに気付いて中隊長にその旨を報告すると中隊長からどなられ、二人で山に登り途中まで行ったが遺骨を持ち帰る事が出来なかった。残念でならない。戦友に申し訳無い、後まで忘れられない。

雲南省最後の陣地憂中に陣をとり、死守の命令を受けた。昭和十九年十二月二十六日のことである。いよいよこれが最後と分隊長が恩賜のタバコ二本と恩賜の酒を掛盒に一杯を各分隊各員で廻し飲み、覚悟を決めてそれぞれ陣地についた。

昭和十九年十二月三十日、浸透してきた無数の敵で陣地の下は充満。いつもの通りの正攻法で先ず空から猛烈な爆撃、戦闘機の機銃掃射、四連砲の猛射、頭もあげられない。敵は交通壕の中まで侵入してきた。手榴弾で応戦。もう弾がない、どうすることもできない。これが最後かと思った時、中隊長が撤退準備のため

「音を発する物は防音装置をして命令を待て」と。軍靴までも脱いで準備を完了した時は二十年一月一日の朝であった。午前三時頃葡萄前進で山道を進み、夜が白々明けると共に下を見下すと谷間に川が流れていた。その川の水を飲むために一目散に下りて水を飲んだ。その水の美味かったこと、それで元気が出た。

一息ついて各分隊が谷底で警戒していたら、山の頂上から盲射ちに乱射してくる。応戦をしながら撤退、夜が来るのが待ち遠しかった。小銃隊を先頭にシヤホウ峠を下った。遙か下で灯火が見えた時はとても嬉しかった。部隊は六キロ行軍でラシオに転進命令、その時既に英印軍空挺部隊はビルマの草原に降下していた。後方を遮断する包囲作戦である。

後方が遮断された。負傷者、病人、馬匹、食糧、彈薬車、工兵、山砲隊等は一時停止。先ずわれわれ竜兵団の歩兵部隊が本道に通ずる利剣山を目標に攻撃を準備した。第二大隊第四中隊を先頭に機関銃一個小隊、利剣山中腹まで攻撃前進したが敵の激しい砲火に前進を阻止された。停止待機しつつ、小銃隊は右へ迂回作

戦をとり部隊の一部が分進した。自分は中隊長と共に木陰で重機の銃身を持ち三脚の到着を今か今かと待ったが一向に到着しない。

後続の分隊が到着、山上に向けて重機の射撃を開始した。射撃の発火をみて敵が真上から一斉に猛射、重機二番射手に敵弾が命中即死した。その前のタコ壺にいた指揮班の兵長も壮烈な戦死を遂げた。迂回していた別動隊と呼応して中隊は一斉に敵陣に肉迫し、機をみて中隊長の突撃命令と共に敵の陣地に突入した。壮絶な白兵戦の後遂に敵陣を占領したが、味方の損害も大きく、戦死、負傷者を多数出した。

後方に待機中の山砲隊、工兵隊、傷病兵は速やかにラシオまで撤退のため移動を開始した。我々の大隊も撤退道路を確保しつつラシオに向けて前進、敵英印軍は既にラシオ周辺に陣地を構築、日本軍を撃滅すべく攻撃準備中であるとの情報が入っている。

歩兵第一四八連隊第二大隊、第三大隊を第一線に展開、連隊本部はラシオの岩山の横穴に陣をとり戦機を待つ。

重機の銃座より下を見下ろすと敵は戦車を先頭にして約十メートル下の道路まで侵入してきた。その時轟音と共に敵の輸送機が飛来、連隊本部の岩山周辺とドラム缶数百本を横穴を中心にして投下、直ちに戦闘機による曳光弾投下、ドラム缶は各個に爆発もうもうたる黒煙と真っ赤な火災が一面を覆う。

我々は撤退命令により重機を銃座から撤収して分解、ラシオを流れる川まで五百メートルの土手上まで弾薬手一名を置き去りにして撤収した。速やかに重機を組み立て戦闘準備をして待機していると、敵の戦車砲の集中砲火を浴び一目散にラシオの出口の橋のある所まで無我夢中で撤退した。その時師団からの緊急命令で大隊はシポアの野戦倉庫の米の集積所の焼却命令を受けシポアに急行転進することになった。十台の軍用トラックに分乗しラシオからシポアまで約二十キロの道程である。

シポアの入口で下車すると前方から戦車の音がした。戦車の砲塔に少佐の肩章を付けた参謀が身を乗り出すようにして、いきなり大隊長に早く出発して倉庫を焼

却するように命令した。シポアに通ずる道は左側は絶壁、右側は川である。右側の川の向こうは英印軍が占領している。大隊長命令で全部の物に防音装置をし軍靴も脱ぎ巻脚絆で足を巻き行動を開始した。約八キロ程行つてシポアの野戦倉庫に着く。ビルマ米の袋が野積みにして、あるはあるは、乾いた木屑を拾い集め火を付ける。米の燃える火で飯盆炊さん。目的は違つたが英印軍は我々に向かって攻撃を開始、小銃隊が応戦、負傷者も多数出ている。撤退準備をして闇夜の道を抜き足差し足で約二メートル間隔で走り、ようやくシポアの入口まで来た。我々の分隊には負傷者はなかったが、他の分隊の負傷者を担架に乗せ運んで行く。さあこれからが大変である。四人交替で負傷者の担架をかつぎながらビルマ高原のシャン高原へと急行軍を続け、ようやく着いた所がカロー付近である。

二、三日休養をとり休んでいたところ緊急命令があり、ビルマ本道を通過中の菊兵团、狼兵团が敵の戦車群に襲われ甚大な被害を受け苦戦中である。竜兵团はこれを応援するためシャン高原を下り、メークテイ

ラー救援の命令を受けた。隊員は疲労困憊していて動く元氣もない有様であるが、足を引きずってカローまで前進、三日間の休養をかねて待機した。

第二大隊、第三大隊は谷の両側の稜線に陣地を構築して警戒していたら、敵の戦車がカローの七曲り付近に姿を現わし、峠口からこちらに向けて攻撃前進してきた。大隊長は戦闘配置を命令、戦車に追隨する歩兵三十名位に重機の一斉射撃を命じた。先頭車両は一旦停止したが直ちに濛々たる煙幕を張り谷は煙で充滿した。戦車は十六両の全砲口を我が軍に向け射ちまくってきた。砲弾の雨で炸裂の破片で頭も上げられない。敵の火力の物凄さには重機、小銃ぐらいでは齒が立たず夜が来るのが待ち遠しかった。その時工兵隊がカロー入口の橋を爆破する爆音が轟いた。戦車は前進できず立往生してしまった。しかし敵の歩兵が攻撃前進、応戦の後我々は後退を開始した。竜兵団のマークテイラー救援は遂に達成することができずシャン高原に撤退した。

時に昭和二十年八月一日ごろと思う。シャン高原の

インレイ湖を流れるナンピル河の兩岸の山に野営、横穴に十二、三日宿営、河を渡り、サンカ付近を行軍中、我が大隊の命令受領者である指揮班の軍曹が大隊長に對し終戦の報があったことを報告した。我々は何が何だか直ちには理解出来ず、ただ茫然とするばかりだった、男泣きに涙をポロポロ流す者もいた。後で日本の無条件降伏を知った。敵戦闘機が飛来するが攻撃はない。飛び去るだけである。戦争が終わったなあと実感が胸にしみてくる。三日後に英軍将校がジープで軍使として師団長に面談、武装解除その他の件を協議して帰った。

小銃、機関銃、山砲その他の武器はよく手入れをして、菊の紋は削り取り倉庫に納めた。サルイン河ロイスーまで行軍、いよいよタイ国に向けて渡河準備、負傷者、病人等の搬送にタイの象を備い、歩ける者は徒歩でチェンマイまで行軍した。約二十日の行程であったが軍靴の半張りは破れてなくなり、底は裸足でパクパクするので脚絆で巻いて歩いた。これもスリ切れて裸足行軍であった。

チエンマイに着くと同時にマラリア、アムバ赤痢等でバタバタ倒れる者が続出、軍医、衛生兵は目の廻るような忙しさで、手の付けようもない有様であった。

自分もマラリアで倒れ、三日間休養、その後薬を飲み療養をして貰い一週間の休養をとった。歩ける者は行軍、その後列車で集結地であるバンコクから二十キロの地点ナコンナヨウクという山田長政ゆかりの地まで行き、そこで六か月の生活が始まるのである。

この建物は中支から南下した熊本師団が建てたもので、我々竜師団、菊師団が約六か月間ここで英印軍監視のもと生活することになる。竜師団が最初に帰国することになり、ナコンナヨウク発、昭和二十一年五月七日バンコク埠頭に着く。英印軍上陸用舟艇で河口まで行きアメリカの八千トン級リパティに乗りこみ出航した。

昭和二十一年五月二十七日、東京湾浦賀港着。久留米、福岡、大村連隊等の遺骨二万数千柱も故国の地に帰ってきたのである。

七日間滞船、検便その他の検査の後上陸した。遙か

に富士山を望み見て感無量、涙がとめどもなく流れ、生きて帰れた実感が初めて胸に湧き出てくる。昭和二十一年六月六日竜師団は浦賀で解散した。

戦争という二字は子に孫に至るまであってはならぬことである。昭和十八年九月故国を離れて二年間、連続して戦闘に参加、補充隊員として久留米を出発した者の中で現在生存するもの僅か三名。戦陣の中で壮烈な戦死を遂げた当時の戦友を憶う時、その模様がバナラマのように私の眼底に浮かんでくる。幸にして生還して炭鉱、会社に職を得て働いているが、一面では申し訳ない気もする。竜歩兵第一四八連隊の五十回忌を鳥栖市の寺で執行しました。合掌。

### 【解 説】

ビルマの作戦、戦闘という点、「インパール作戦」を論ずることが最も多い。また、この結果の悲惨な敗北が、今次大戦に対する批判の大きな部位を占めると思ふ。及川氏の体験はビルマ戦末期の記述であるが、インパール作戦「ウ号作戦」を中心にして概説を試みて

みたい。

大本営が昭和十六年の太平洋戦争のための南方作戦の「作戦目的」にある占領を企図する地域の中に、ビルマも入っているが、作戦指導要領の末に「…以上の間、機を見て南部ビルマの航空基地等を奪取し、なお状況これを許せば、ビルマ処理のための作戦を実施する」とあり、使用兵力は第十五軍（タイ国およびビルマ方面に作戦）を使用予定する。

南方第一段作戦の第三期、南部ビルマ方面の航空基地整備が終わり、第十五軍は昭和十七年三月、ラングーン付近で英印軍を破り、同地を占領。続いて中部各地に転戦、五月中旬カレワ付近（チンドウイン河上流、マンダレー北西、直距離二百十キロ）で約三万の英印軍主力を撃滅して、ビルマ進攻作戦は一応順調に目的を達し、作戦は打ち切られた。

問題の「ウ号作戦IIインパール作戦」は昭和十九年三月新設されたビルマ方面軍により実施されたが、その頃、及川氏の参戦したビルマ北方及び雲南地区の状況は次のようである。

昭和十九年一月中旬から重慶新編第一軍（二、三個師団）が第十八師団（菊兵団）を攻撃しながら北方より逐次南下していた。また、中国の雲南方面の雲南遠征軍は約十個師団をもって怒江（サルウィン河上流）を渡河し逐次第五十六師団（竜兵団）を圧迫しつつあった。

その他、南部海岸では英印軍二個師団が反攻開始、中部ビルマ地区には、三月初旬、有力な英グライダー部隊が降下し、各所に陣地や飛行場を作り始め、ビルマ戦線は逐次攻守所を替えつつあった。

この時に第十五軍の第三十三師団（弓兵団）、第十五師団（祭兵団）、第三十一師団（豹兵団）は、インパール及びコヒマへ進撃しつつあった。しかし、その後補給なき第十五軍は、インパール攻撃に行き詰まり、悲惨な退却をしなければならなかったことは周知の通りであるので割愛する。

前述のように、北部ビルマの戦況は益々悪化し、米装備された中国軍は、フーコン谷地より南下、第十八師団に進展しつつ「カマイン」（ミートキーナ西約七

十キロ)を占領。更に要衝ミートキーナには、米英軍がグライダーで降下し、五月十七日より八月三日の間、完全包囲三か月、籠城部隊は玉砕した。

第十八師団救援の第四十九師団(狼兵団)は、グライダー部隊の妨害を受け、更に交通路が破壊されたため、分散攻撃となり戦力は低下し、その目的を充分果たすことが出来なかった。

第五十六師団方面では、雲南遠征軍約十六個師団の中国軍に対し鬼神も哭く戦闘を続け、拉孟、騰越、龍陵、平曼、芒市等においては玉砕等を含む悲惨な戦況を呈していた。このようにして、九州編成両師団基幹の諸部隊は、ビルマの助っ人と称された第四十九師団を含め、終戦まで、悪戦苦闘の連続であった。

### 【ビルマ方面軍編成表】

- 方面軍司令部 河邊 正三中将
- 第十五軍司令部 牟田口廉也中将
- 第十五師団、第三十一師団、第三十三師団基幹。
- 第二十八軍司令部 桜井省三中将
- 第二師団(勇)、第五十四師団(兵)、第五十五師

団(壮)基幹。

方面軍直轄、第十八師団、第五十六師団、独立混成第二十四旅団(巖)等

### 【連合軍地上軍指導組織】

- 東南アジア同盟国地上軍司令官 リース中将
- 第十五軍団、第二十五師団(印度)、第二十六師団(印度)、第八十一師団(西アフリカ)、第八十二師団(西アフリカ)、第五十戦車旅団、第二十二旅団、第三歩兵旅団
- 第十四軍 軍直第五師団
- 第四軍団 第七師団(印)、第十七師団(印)、第二五五戦車旅団、シャイ旅団
- 第二十八旅団(東アフリカ)
- 第三十三軍団
- 第二師団(英)、第十九師団(印)、第二十師団(印)、第二五四戦車旅団、第二六八歩兵旅団
- インド・ビルマ戦区軍司令官 スルタン中将軍(リース中将指導統制下)
- 戦区軍直 第三十六師団(英) 戦車旅団(中国)

新編第一軍

第三十師團(中)、第三十八師團(中)

新編第六軍

第十四師團(中)、第二十二師團(中)、第五十師

團(中)

雲南遠征軍(中國)